

## [50] ノイマイヤー振付『時<sup>と</sup>節<sup>き</sup>の色』

### ～日本への新鮮な切り口～

2000年2月25日 東京新聞 夕刊

バレエの世界では昔から、一流の振付家は各国のバレエ団の芸術監督として招かれ、新作を振り付けて歩くのがふつうだった。バレエ後進国はどのようにして新しいスタイルや技術を導入したのである。それは現在でも変わらない。

しかし日本ではどういいうわけか外国の振付家に新作を依頼するバレエ団がとても少ない。ほとんど無いと言ってもいい。外国人の建築家が日本で設計しても誰も驚かないし、高級レストランのシェフが外国人というのも今どきありふれた話なのに、ふしぎなことだ。

というわけで、ノイマイヤーが東京バレエ団のために新作を振り付け、この二月に初演したのは大きなトピックである。ノイマイヤーはアメリカ出身で長らくドイツのハンブルク・バレエの芸術監督の座にある世界有数の振付家だが、その彼が日本で新作を作ったのは、今回と同じ東京バレエ団「月に寄せる七つの俳句』について十年ぶりのことになる。

新作のタイトルは『時<sup>と</sup>節<sup>き</sup>の色』。日本の風土がテーマである。日本独特の繊細な季節感が振付家の心をとらえたのだという。アメリカ系ヨーロッパ人の眼に映る日本。それは慣れて無感覚になっていく私たちの眼に、日本についての新鮮な切り口を呈示してくれるのではあるまいか。

舞台には大きな直方体が四つ。それが音もなく

## [50] ノイマイヤー振付『時<sup>と</sup>節<sup>き</sup>の色』

### ～日本への新鮮な切り口～

2000年2月25日 東京新聞 夕刊

移動して空間を変容させ、ダンスが季節の色に染め上げる。季節の変化は心の移ろいであり、人生の深みでもある。

中心的な存在として一人の男（高岸直樹）がいる。男には分身ともいべき三つの影（後藤晴雄、大島正樹、森田雅順）がついていて、それぞれ違う表情を見せる。男をうながし、先へと導く「時」（本村和男）。そして男につきまとう「想い出」（斎藤友佳理）。

彼らをつつむ心象風景として、時節が巡っていく。凍てつく冬。すべてが死に絶えたような静寂のなかに春の光と温もりが現れ、やがて活動と情熱の夏になる。

音楽が詩情豊かで、すばらしい。ドビュッシー、富田勲、シューベルト、ヴィヴァルディ、メンデルスゾーン、三木稔、ヴェルディ、湯浅譲二の和洋八人の作品をミックスし、カラーージュしてあるのだが、その転換にデリケートなニュアンスがある。全体として完成された統一感がある。幾つもの曲の断章をパッチワークのように組み合わせ構成した部分では、それぞれの曲の持ち味を生かしながら、もう一段高い創意に達して見事だ。

振付は前作の『七つの俳句』に比べると遙かに精緻である。この十年でバレエ団の技術水準が向上したのがその理由だろう。ことさらに日本らしさを衒った動きではないが、ある種の内向性や静

## [50] ノイマイヤー振付『時<sup>と</sup>節<sup>き</sup>の色』

### ～日本への新鮮な切り口～

2000年2月25日 東京新聞 夕刊

けさ、しつとりした触感などに振付家の意図が感じとれる。

それにまた日本人のダンサーの特性がよく生かされているのも興味深い。同じ踊りをノイマイヤーの本拠のハンブルク・バレエが踊ってもそれなりの見応えになるだろうが、味わいはまったく違うものになるはずだ。主演の高岸直樹と斎藤友佳理、そして木村和男が振付を咀嚼しつつ自己を主張して、各人の個性を際立たせる演技をしたのがよかった。

特に印象に残った場面は、肢体を複雑に絡み合わせて冬の苦闘を語った二組の墨色のパ・ド・ドウ。青灰色のロングドレスでアルカイックな造形を見せた春の女性群舞。赤いパンツの夏の男たちが腰のバネをフルに使って畳みかけた低い躍動。そして男と「時」の、しのぎを削るような鋭い男性パ・ド・ドウなど。

それにしてもダンサーには苦しい舞台だったにちがいない。低く腰を落として粘る動きは日本の身体表現に近いものがあるが、高い重心を基本とするバレエのメソードとは異質である。外国人の振付家によってもたらされた「日本」に日米人のダンサーが苦勞するというのも面白いが、そこに日本というものの、ダンスというものの本質がうかがわれるのも事実である。